

ご自宅で最後まで 介護されることを考える方々へ



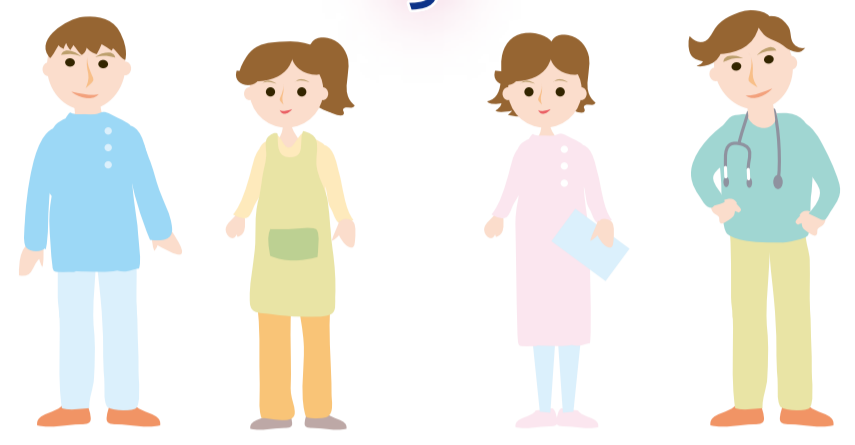
病気によっては、症状を和らげることを主に行う段階に達することがあります。やがて、臨終を視野に入れる必要も出てきます。

死別は、患者さんにもご家族にもことのほかつらい体験です。そのとき、これからどうなるのか、どうしたらよいのか、不安や恐れを覚えることと思います。

不安や恐れは、その対象を知ること、ある程度軽減します。そこで、臨終とは自然なこと、どなたでも臨終を迎えられることをお伝えして、皆様の不安や恐れを少しでも和らげて、十分な介護ができるようにしたいと思います。

発行：十勝連携の会
(北海道医療連携推進事業により作成)

私たちが支えます



この小冊子のおもな対象は、ご臨終を迎える方を持つご家族です。ただ、患者ご本人が希望されれば、読んでいただいて結構です。お読みになった患者さんは満足されていました。なお、この小冊子は、継続的に診療を受けている方を対象としています。入院・入所の間でも使うことができます。

知りたいことは、人それぞれです。少しだけ知りたいという方には、斜め読みでもご理解いただけます。

疑問に思うことや不安や恐れは、遠慮なく私たち専門職員にお話してください。実は、私たち専門職にも臨終には不安や恐れがあります。しかし、この時期を患者さんやご家族とともに乗り切りたいと願っています。

臨終のあとに

愛する人を亡くすと、私たちは悲しみにおそわれます。そして、備えのな
いまま、それまでとは異なる新しい世界に放り込まれます。その新しい世
界にすぐには適応できないために、悲しみに加えて様々な苦痛が生じま
す。その苦しい時間の過ごし方をいくつか提案します。

死別直後は
涙は多いほど悲しみは軽くなると思われがちです。そのためにも、ご家族やご
友人とアルバムを見たり、故人の思い出を話したりする機会を積極的に
作ります。なお、ご友人の立場なら、電話はご遺族に負担になることに留
意します。日々のお仕事などをこなすことも大切です。行事があれば、できるだけ
参加します。ただし、重要な決定は、できれば先延ばししたほうがよいで
しょう。

ある程度、落ち着いても
愛する人を失った悲しみを早く癒す方法はありません。同じ悲しみを
有する人たちが話すこと、あるいは話を聞いてくれる人と話し合うこと
は有意義です。そういった場があるか、専門職員に尋ねてみましょう。
悲しみに効く薬はありません。専門職から勧められても、薬は断りま
す。お酒も害のほうが多いので断りません。時間はかかりますが、必ず
元のような生活に戻ることができます。当面は、辛抱が求められます。

《おわりに》

病気の経過や最期の姿には個人差があります。ここに示したとおりに
なるとは限りませんが、急な変化もあり得ることをご理解ください。知る
ことは怖いことでもありません。しかし、私たち専門職員が皆様を支え、心
残りなく患者さんをお世話できるよう支援します。どんなことでも結構
ですので、遠慮なく、いつでもお声をかけください。

参考書
谷田憲俊著 患者・家族の緩和ケアを支援するスピリチュアルケア
一初診から悲嘆まで (診断と治療社発行 2008年)

あなたの連絡先

訪問看護

訪問診察

そのほか

発行日 2013年9月1日

発行者 十勝連携の会(通称：十(てん)むすの会)

発行所 医療法人社団博愛会開西病院在宅ケアセンター
〒080-2473 北海道帯広市西23条南2-16-27
ホームページ: <http://www.ten-musu.org/index.html>
イラスト・デザイン エフエム
<http://www.fbminc.com/>